

ジョン・サールとのインタビュー:ジュリアン・ムーア  
Interview With John Searle By Julian Moore  
Philosophy Now 25:37-41 (1999)

ムーア:

インタビューに応じていただいております。あなたのもっとも最近の著作、『心、言語、社会』を含めて、いくつかのことを知る機会ができて、個人的に大変光栄です。その本はまさに始めから、発話行為へもどるように思えますが…

サール:

その通り。あなたの言うとおり。

ムーア:

…しかしそれは意図的な作戦でしたか？

サール:

いやとんでもない。わたしはいつもその都度ひとつの問題を解決しようとしている。結局、全部一緒になるということになる。私が発話行為を研究していた時のことを考えてほしい。私は最終的に心の哲学への負債を支払わなければならないことがわかったんだ。信念とか、欲求とか、意図とか、行為とか難しい概念を使っていたからね。だから、最後には腰を落ち着けて、やり遂げなければならないと観念した。けど、それに取り組み始めたら、心の理論がすでに発話行為の理論にあることがはつきりしたんだ。それで『志向性』という本を書いた。その本でそれを詳しく説明した。そしてもちろん、あるものはアイデアの萌芽だったし、別のものは詳しくやり遂げた。その後でやり遂げたとき、それは心の哲学の一般的问题になったんだ。それでそれをやっているとき心の哲学で話されている、すべての頭のおかしいあれこれすべてを発見したんだよ。脳が本当はコンピュータだとか、心はソフトウェアだとかそのたぐいのすべてのガラクタだ。だから私は『心の再発見』という本を書いてそれを攻撃したんだ。その後、私をつねに悩ませきた問題があった。それは社会的現実の本性についての問題だ。私の言語哲学にそれは潜在しているものこそ、社会的現実の理論だと思った。だから私はそれについての本を書いた。『社会的現実の構成』という本だ。だから人は人生で一冊の本を書くという意味がある。それはただどんどん大きくなったんだ。

ムーア:

1冊の本になる章、シリーズになる本…

サール:

そのとおり。そしてあなたが子ども時代からこれを計画していたにちがいないようにみえるけれど、それとは違う道を歩むんだ。それはそれ自身で成長し、首尾一貫して育ったのさ。

ムーア:

社会的現実の創出についてお聞きしますが、それは当時の不穏な社会情勢の説明を探しているラジカルな活動家としてあなたの若い学生時代まで遡るのですか。

サール:

そうだけど、奇妙な感じでね。本当に言葉で言い表せないようなことが、学生運動の時代私に降りかかったんだ。私たちがもっていたボキャブラリーといえば、最悪のジャーナリズムの類いか、ものすごく抽象的なプラトンの国家や正義の理論だったのさ。そしてほとんど教授陣の支持者のいない学生グループが、私はまったく暫くの間学生運動を支持したたったひとりの正規の教員だったんだが、どうしたら私たちは大学のエスタブリッシュメントを打ち負かすかパークレーでどうしたら本物にできるかその時困ったことになっていた。私はそれを本にも実際書いた。私の本『キャンパス・ウォー』っていう本のある種の脚注でね。学生運動の時代社会理論を要求したのではなくて、なにか社会理論がこれを説明すべきだろうは思った。だけど私はそれをどうしたらいいかわからなかったのさ。そして私はまだある程度これは真だし、これについて別の本を書きたいとは思っているんだ。私たちには中庸の政治哲学がないのさ。政治は日々のジャーナリズムのレベルか、ロールズの『正義論』みたいな国家の抽象的理論の言葉のどちらかでしか議論されない。けど、「社会主義はどうなったんだ」とか「何が失敗したんだ」とか「何が起こったんだ」とか言う、あるいはそれを問うことを可能にするボキャブラリーがなかった。「サッチャーが社会主義を殺して労働党を救った」とか言うだけは十分じゃないってことだ。それはたぶん正しいけど、まだジャーナリズムのレベルなのさ。だから私はそのすべてをやらなくては、私はまだやっていないと思う。この社会的実体はとにかく何なのか、社会的制度的事実のこの構造は何なのかと理論をやり遂げようとする、その始めをやったんだ。

ムーア:

あなたはそれを言葉になさいました。けれどわたしは、うまくいく状態で社会の精神生活があるかどうか、それ自体成立するような対話があるかどうか、わたしにはよくわかりません。

サール:

そうだね。わたしはそのような何かが正しい深いレベルがあると私は思う。私がした説明で、社

会的現実とは人々がどう考えるかの問題であり、人々が考えるものは、人々が互いにどう語るか、互いにどう関係するかの問題だということだ。だから言葉なしに社会的現実はありません、言語なしに人間社会の現実はない。言語的表象が一部事実について構成的である制度的構造の集合をあなたはもたなければならない。これはインタビューだよ。私たちはインタビューだとわかっているから、何をすべきかわかっているんだ。カクテルパーティーとか殴りあいなら、違うやりかを知っているはずだ。けれど社会的現実を表象する何らかの方法がなければならないんだ。

ムーア:

しかし私たちは何をすべきかどうやって知ることができるのですか。会話で発話行為について語る際、J.L.オースティンの業績を引き継いだ際、あなたは発話内行為と発話媒介行為について語りました。どう違うのですか。

サール:

それは簡単だ。発話媒介行為は、発話行為が、聞き手が理解したら聞き手にもつ効果の問題だと考えている。発話内行為はメッセージを伝えることの問題だ。発話内効果は理解のひとつだ。あなたが「雨降っているか」と私に問い、私が「ああ、降っているよ」と言うなら、発話内的効果は雨が降っていると言ったと私があなたに理解させることだ。発話媒介行為はあなたに雨が降っているという信念を産んだり、あなたに傘を持たせるようなことをだろう。だからコミュニケーションすること、すなわちあなたにあなたのメッセージを伝えることと、さらにそれがもつ効果の間に、明確な直感的区別があると私は考える。さてもちろんコミュニケーションはなんでも通常、さらに効果がある。私たちは人々に意見を確信させ、やり方を変え、期待を安心させたい。なぜなら私たちは約束をしたからだ。けどやはり、あなたは — これはオースティンの偉大な貢献である方法で — 発話行為それ自体とさらなる効果の間の厳密な理論的区別を必要だ。行動主義者たちはつねに他の人々に行動の効果を生むことについて利用することを望んだ。そしてそれは仕掛けとして粗雑すぎた。だから私は明確な区別があると思う。

ムーア:

あなたはさらに先に進み、発話行為を命令的、責務的、主張的、表明的、宣言的イエー!などに分けました。そしてそのアイデアはそれらのカテゴリーの存在は偶然的ではありえない。あなたが完全に異なるカテゴリーをもつ言語は見つけられませんでした。

サール:

それはとにかく心の本性の結果でなければならなかったんだ。私の言語理論が正しければ、その可能性はある。あなたは完全に新たな種類の発話行為を発明しに行くことはできないよ。ウィトゲンシュタインつねに新しい言語ゲームを発明することができると私たち語っている。私は学

生にそうするよう求めたものだ。「OK、明日までに新しい言語ゲームを持ってこい」とね。それは結局発話行為に関する限り、いつも古いものの新たなバリエーションになったんだ。今では分類の基礎は心が現実を表象できる方法の有限の数しかないということだ。それは心の世界への適合方向でそれを表現できる。それであなたは何か、たとえば「雨が降っている」が真か偽として表象する。あるいはあなたは世界から心への適合方向でそれを表象できる。だから私があるあなたに「ドアを閉めろ」と言うなら、わたしは精神的ないし言語的内容に適合するようあなたの行動を変化させようと試みるということだ。その場合あなたは宣言のケースの適合方向と表現のケースの空の適合方向の両方を受け取ることになる。

ムーア:

面白いですね。しかしそれは問われる必要があると考えます。一なぜ私たちは世界の何かに影響しないなら自分をわざわざ表明するのですか。おそらく単に自分がどのように感じるかを表明することは何らかの方法で誰かが応えるよう招くことではないですか。

サール:

それはありえるね。

ムーア:

つまり一体空の発話行為の趣旨は何なんでしょうか。

サール:

表明的の趣旨は既に存在しているとあなたが前提しているなんらかの事態についてのあなたの感情や態度を表明することだ。だからあなたはすでにやったことが悪いと考えるなにかについて謝罪したり、誰かに感謝したりする。そして私は感謝や、謝罪の場合後悔や、誰かの幸運に喜びを表明することができるなら、社会はよりよく働くようになることに、表明的発話行為があることの趣旨があると思う。

ムーア:

しかしそれは心へのというより社会への訴えですね。そのような仕方ではそれは疑いなく貢献しますが、なぜそれは起きるんですか。

サール:

なぜなら私たちはケダモノの一種だからだよ。なぜ私は友人たちにいいことがあったら、彼らを祝うんだい？私がそれがいいと感じるからだ。そして彼らは私がそれがいいと感じることをいい

と感じるのさ。それには名前がある。それは「祝福」と呼ばれる。「ジーザス!君がレースに勝って嬉しいよ」とかなんとか。だから私たちの感情や態度を表明するわけだ。それは人の行動を変えることじゃない。たぶんあなたが女性を口説くとき、あなたは彼女の行動を変えようとして、あらゆる表現の発話行為をする。けれど表現的発話行為をする理由は様々で、私はなにか単純な動機があるとは思わない。そういう感情や態度を持つことは社会的関係の一部で、他人と関わるひとつの方法は彼らに感情や態度を伝えることなのさ。

ムーア:

けれどコミュニケーションの趣旨全体は意味を交換することでは?

サール:

そのとおり。

ムーア:

そしてあなたは構文論と意味論の区別を大きく使います。構文論は言語の形式的構造でひとは普通、何が起きているかを理解できるようにする言語の一部として意味論を理解するでしょう。しかし様々な場所で、ネットワークとバックグラウンドの概念、人によっては不必要に複雑と思う概念を導入します。バックグラウンドとネットワークとはなにか、それらは何の役に立つのかもちろん教えていただけますよね。

サール:

OK、それはいい質問だ。それはまだもつと働く必要があると考えている。今非常に広まっている見方がある。それはワイトゲンシュタインと場合によっては「ホーリズム」と呼ばれるような人々に由来すると推察している。そしてその考えはあなたは他の文に関係で文でのみ理解するというものだ。だからあなたが何がドアである何か、ドアが家の部屋にはいるのに開けるべき物と理解する場合に限り、あなたは「ドアを閉めろ」を理解する。その上あなたは家とはなにか、部屋へ入るとはなにかを理解していなければならない。だからどんな文を理解するためにも、あなたは他の文や言葉のネットワーク内でのみ理解できるように見える。しかし文に真であることは信念についても真だ。ドアが閉まっていると信じるためには、あなたは他の多くの信念すべてをもっていなければならない。さてそれを私はネットワークと呼ぶ。だが今度あなたはネットワークのスレッドを辿ろうとするならこうなる。あなたが「OK、これについては忘れちゃいけないから、それをすべて書いておいてくれ」とあなたが考えるなら。きみはどうやってもまったくそれができないことを知る。なぜならそれは無限に続くからだ。新しい文を書いたたび、あなたはその分を説明するのに必要なさらに多くの文を手に入れなければならないことになる。今度は私があなたにしているのは形式

的に演繹な議論ではないが、明白な妥当性の議論だ。それはこのネットワークは、人々がちょうどもっている能力の集合に辿り着くと考えるのが最善なのを見ろと言う。人々は物事のやり方を知っている。人々は何が部屋に歩いて入ることか、ドアを開けて、椅子に座ることを知っている。そのような能力はネットワークの意味論的内容を解釈する私たちの能力を基礎づけると私は考える。そしてその能力の集合を私はバックグラウンドと呼ぶ。今私は再びこのような何かがワイトゲンシュタインにあると考える。これを言った最初の哲学者については分からないが、実際注意深く見れば、これを多くの哲学にみつけるだろう。あなたはヒュームにそれを見出す。なぜならヒュームはつねにこう言っている。「さて私たちは単にこれらの習慣をもつ。私たちは単にこのように振る舞う気質をもっている」とね。

ムーア:

あなたは頻繁にワイトゲンシュタインに言及しました。明らかにJ.L.オースチンも、インスピレーションの偉大な源泉でした。私はあなたがバークレーと一緒に仕事をしたと思うのですが。

サール:

いや、オックスフォードでだよ。私の学位は全部オックスフォードだ。オースチンは私が学生のとときオックスフォードを離れてバークレーの客員教授になったんだ。

ムーア:

オースチンはたしかに素晴らしい哲学者でした。私は彼の本『センスとセンシビリア』は私が知るかぎり、既存の真面目な哲学の本の中でもっともおかしい本であると思います。

サール:

たぶんそうだよ。私は講義に行った。私たちがオースチンの本とよんでいるものは、実際は本じゃなかった。それらは彼がした講義で、彼が他界したあと本として出版されたんだ。オースチンは大変注意深く、大変正確だった。彼はこの形で講義が本にされることを認めなかった。なぜならそれはあまりに非公式で、一部は仕上げられていなかったからだ。けど私はそのやり方は素晴らしいと思う。私たちはラッキーだった。彼の講義ノートを本に出来たからだ。

ムーア:

私はオースチンの議論やその表現の様式はとても手応えがあると思います。彼はその調子に暗黙である多くの物や議論のレトリックの役割に目を向けることで、エイヤーのパラグラフを非常に美しく、非常に機知に富んで粉碎しました。あなたは少しもレトリックには反対してません。あなた自身時折そうしませんか？

サール:

さてさて、あなたは効果的にコミュニケーションしなければならないと思うよ。私はレトリックが論理の代わりになるとは思わないが、人々がそれを理解できないとか、議論の力を理解できないなら文句はないと思う。私の中国語の部屋の議論を取り上げよう。その有効性の多くは単に抽象的構造 — 構文論は意味論に十分ではない — を扱わなければならないというだけでなく、誰でもわかる単純な例がここにあるという事実由来する。中国語のカードの束がある部屋に閉じ込められる。そして壁の穴を通して入ってくるカードに応じて、どんなカードを返すべきかあなたに指示するプログラムをあなたはもっている。そして結局、あなたは中国語を理解できない。今では小学生でもこれはわかる。

ムーア:

しかし意識についての現在の関心の文脈では、中国語の部屋はおそらく今日世界中で最も有名な哲学的議論ですよ。

サール:

ほんとうに？

ムーア:

私はそう言いたいと思います。なぜなら哲学的議論というものは主流の新聞にほとんど載らないからです。それはテレビに登場しました。BBCのホライゾンがそれについてドキュメンタリーを放送したことがあります。それはとても良かった。なぜなら言語、意識そしてミニチュアですが社会関係さえその構成要素にひとまとめにしています。なぜならあなたは教室でやっていることをもつてると同時にその外で本物の人格をもっているからです。しかしその議論は時を経て変わったように見えます。あなたがコンピュータで動くプログラムもうpって心をもつのは可能ではないと考え続けています。しかしあなたは特定のプログラムないしアルゴリズムを、あるいは記号を操作する形式的なメカニズムによって実行されるなにかを制限するのですか。

サール:

さてそれはたいへんいい質問だとおもうよ。議論の基礎はコンピュータプログラムの形式的記号操作はここを保証するのに十分じゃない。そしてその例の美しさは私は意識を考慮する必要がないということだ。そして第二に、私は「どのようにわかるの？」という問いに答える必要もなかった。なぜなら私はそれを自分のために作ったのであり、私は現に中国語がわからない。だが今となつては、その質問はコンピュータ処理は何を意味するかということだ。そしてもちろん私はコンピュータ処理はアルゴリズムで諸段階を実行する問題だという標準的な教科書の定義を

使う。今では一部の人はコネクショニズムについてはどうかと考える。コネクショニズムは並列処理の別名なんだが、論点は変わらない。

ムーア:

私たちはそれをリニアにできる。それは全然議論に影響を与えない。

サール:

あなたは絶対に正しい。ほとんどの人はその点を見逃すんだ。私たちはそれを彼らに説明しなくてはならない。私たちはチャーチ=チューリング・テーゼから、並列コンピュータで処理できるどんなコンピュータ処理も古典的コンピュータで処理できるのがわかっているということだ。だからコネクショニズムのコンピュータ処理能力は古典的コンピュータより微塵もマシではないということだ。

ムーア:

しかし取り上げたいいくつかの興味深い問題はまだあります。オリジナルの例では、あなたはシャンクの業績のうえに構築し、その後それを中国語の記号の交換に変えました。外の人は「質問」を入れ、「答え」が出てきます。そのプロセスにどんなラベルを貼るかは、完全に任意です。その代わりに、それが外の中国語を話す通訳に話すことに代えると考えてみてください。そして彼らは「部屋の中がどうだかわかりませんが、とても楽しくお話をしました」と言ったとします。それは議論にとってどうなりますか。それはそれが可能であるために、他の多く、意味ある会話をもつための共通のバックグラウンド、なんらかの志向性、の存在が認められなければならないだろうということ示唆するように思えます。

サール:

そうだねえ、だけど問題は彼らは間違いだということだ。つまり彼らは意味ある会話をしていると考えるけど、それは彼らの対話者は、つまり私だが、それらの質問をすべて無意味な記号として扱うことになるんだ。彼らが話しかけるように見える人は彼らの言った言葉を理解していないんだ。

ムーア:

それは、記号=操作装置はなにも理解していないが、全体としてのシステムは理解するという「システムの応答」の本質的議論を扱います。しかしどのようにあなたは異なるレベルの記述の問題を扱うのですか。



サール:

その答えは実に単純だよ。なぜ私は中国語を理解しないのかね。それが全部の質問に答えだ。そしてその答えは、その言葉が何を意味しているか知るべきがないからということだ。私は記号をもつだけだ。「ええ、システムはそれが何を意味しているか知ってますよ」と言うのはよくない。なぜならそのシステムは私が置かれている同じ状況にあるからだ。そのシステムは構文論から、意味論へ至る方法をもたない。それは私やそのシステムには無意味な記号のただの束なんだ。オリジナル出版物の「システムを内面化する:私をシステム全体にしてくれ」と言う言葉でそれを示そう。私は規則を覚え、部屋を出て、外で働こう。やはり私はただの記号をもっているだけだ。だから「システム応答」は部屋全体が理解しているという絶望的な一手だね。それが絶望的な一手だという理由は、部屋は私がもたないいかなるものももたないということだ。「システム応答」は「あなたは本当に中国語を理解している、ただあなたは自分がすることがわからないだけだ」と言うわけだ。

ムーア:

わかっていると思うけど、要素の特徴ではないシステムの特徴があるというのは重要ではないよ。もちろんそれは真だ。しかしこれは特別な特徴なんだ。すなわち構文論から意味論へ、記号から記号の意味へ移る能力だ。その部屋の中で、あなたはそうするどんな方法も手に入れられない。私は記号にどんな精神的内容をくっつける方法をもたない。だから論点は部屋がするかどうかではない。部屋は記号が私がする以上の何かを意味するものを理解する方法を何らもたない。だから個々の要素の特徴ではないシステムの特徴がありえろと言う論点は議論と関係がない。議論は、システムの活動を規定する。構文論は意味論の存在を保証するのに十分ではないということだ。そしてそれは個々の要素についても、システム全体についても真だということだ。

ムーア:

それは重要な点ですね。なぜなら多くのことをまとめるから。もちろん私はわかりましたとはいえないんですが……

サール:

なんでわかってくれないかなあ。私は明白だと思う。それは明白な論点だよ。

ムーア:

さて……また心身二元論の問題もあります、基本的に誤った問いだと言うユニークな方法であなたはそれを扱ったと思います。

サール:

ああ、古臭い問いをすっかり取り除いて、ただ脳がどのように働くかを問うんだ。私たちは脳が働くのを知っている — 私が言いたいのは、私たちは詳しくは知らないが、もっとよく分かるようになるということだ。私たちは脳がどのように働くか理解しようとしている。

ムーア:

それで、頭蓋骨の中で、心と脳の区別を捨てる方法とはどんなものですか？

サール:

人間について？

ムーア:

そうです。

サール:

現実の生活で、あなたがやっているやりかたがそれだよ。脳はニューロンで出来ている。そして個々のニューロンは — あなたは絶対的に正しいよ — いかなる意味論ももたない。けど起きていることは、因果的相互作用 — ただの形式的記号的相互作用ではなく、実際のニューロンの発火とシナプスの活動との因果的関係の因果的相互作用 — がシステムの高次の特徴を引き起こす、すなわち意識と志向性を引き起こす。だから私はシステムの異なる記述レベルがあるという考えをすべて指示する。なぜならそれが私の心身問題を解決する方法だからだ。つまり高次の意味を生み出すこれら無意味な要素の間のこれらの因果関係をあなたがもつことができるということだ。けれどそれは因果的ストーリーではない。それはどのように一片の装置として脳が働くかだ。

ムーア:

それであなたは古典的誤りのひとつがレベルをまたいで問題を産むと考えますか。言い換えると低次の現象との関連で精神状態を説明しようとし続けると、無意味な因果関係が成立すると。

サール:

さて、要点はこうだ。どのように自動車のエンジンが働いているか知りたいなら、記述の異なるレベルがある。シリンダーにおける金属分子の合金と炭化水素の酸化のひとつのレベルがある。

だがもうひとつ別のレベルがある。ピストンとクランクシャフト、そしてクランクシャフトに動力を伝えるフライホイールを回すピストンに圧力を加えるシリンダーでの爆発のレベルがある。それはこれら低次の要素をもつ同じシステムの高次の記述である。類似の指摘を脳についてすることができると言いたい。だが自動車のエンジンと脳の両方ともでシステムについてのこの全ての話は、私たちが関与する因果関係を理解する限りにおいて有効になるというわけだ。

ムーア:

では単にこれらのことをまとめて描写することとは別に『心、言語、社会』の背後の全体的な意図とは何でしたか？

サール:

私が序論で言おうとしたことは、あなたが異なる話題についてのものにみえる多くの本を書くなれば、結局どのようにすべてがまとまってひとつになるかを示す本を書きたくなるということだ。そしてこれはそういう本だ。私は全部それに押し込みはしなかった。私の次の本は合理性についてだ。そして私はこの本に合理性についての章を書いたが、妻がそれを削るよう説得した。詰め込みすぎだからだ。私はすでにあまりにたくさんの素材をもっていた。けど、一連の小さな発見をするときではなく、包括的な理論に至るとき、知的な前進は生まれると私は思考える。そして基本的に哲学者として私は物事がどのように働くか包括的に説明したい。私たちは物理学 — どのように物理的世界が働くか — の非常に良い説明を手に入れたが、精神状態、言語、社会的現実の間の一群の関係の満足な説明をもっていない。この本はそれについてのものだ。

ムーア:

あなたは哲学者は心配しすぎるべきではないと言いますが。むかし、言論の自由や市民権が — これらは擁護されるべきものだ — 「真正な話題」ではないのは恥ずべきだと言いました。しかしとくに人々が感情的になる、あるいは煽動する自由をもつ場合、優れて哲学的問題です。あなたは言論の自由を絶対的に擁護しますか？

サール:

私たちの文化における言論の自由の伝統的擁護は、あまりに弱々しい。それはジョン・スチュアワート・ミルに由来する。それは本質的に功利主義的擁護だ。私たちは、言論の自由があれば、上手くいくし、より幸せだということだ。私はそれはあまりに脆弱だと思う。それは基本的な人間の権利だと思うし、私たちが発話行為を遂行する動物だからそれは正確に基本的な人間の自由だ。それは体を動かす権利のようなものだ。だから問い、「なぜ私たちは自由な発言をもつか」は「さて、社会は自由な発言がないより、合ったほうがうまくいく」と言うことによっては答え

られない。なぜならそれは、社会がうまく行っていない状況で、自由な言論を制限するのが正統化されるように見える。実際、言論の自由を正当化する理由は私たちに関係があると思う。そして私はこれについて何か書くべきだろう。私たちは話すこの能力をもった生物学的人間として、ある種のケモノとして、それは私たちの基本的特徴であるように見える。私はその制限は他のどんな人間の能力の制限と同じだと思う。それは基本的権利の侵害だね。

ムーア:

それは面白いですね。なぜなら、あなたは社会的現実の創出について多くの著作を書いたにも関わらず、その概念を私たちの根本的な本性に連れ戻すからです。どのように社会的現実は実際に私たちの志向性や私たちの発話行為によって生じるのですか？

サール:

さて、それは私の社会的現実の構成についての本だね。『心、現実、社会』でもたくさん繰り返した。基本的なアイデアは、お金、財産、結婚、政府、カクテル・パーティ、大学、テレビ局があり、ある意味で、それが私たちがそれが存在すると信じるため、私たちがそれを受け入れるためによってのみ存在するということだ。そして私はその本で社会的現実を構築するためのたった三つだけの概念を本当に必要とすると論じた。機能の何かへの割り当ての概念を必要とする。また集合的志向性 — 人々が協力して行為しなければならない能力 — を必要とする。そしてあなたは地位=機能と私が呼んだ固有の概念を必要とする。それは何かがある地位を持つと承認される事実によってのみ機能を遂行できるということだ。それはお金、アメリカ合衆国大統領、言語について真だ。それはその本の鍵となる概念だ。そこで私は構成的規則と言う古い概念に戻って、それを使った。それは何かがある何か他のものとみなされるということだ。だからこの紙片は私たちの社会ではお金とみなされるわけだ。だからそれがその本の基本的アイデアで、その後詳しく仕上げたんだ。

ムーア:

人間の権利の文脈で、社会的現実に基づく何かの権利はありますか？あるいはそれは私たちが発話行為アニマルであることに由来する自由な言論の権利のような私たちの本性にすべて根本的なのですか？

サール:

権利は全部社会的に構成されている。あなたは親指を発見するような仕方で権利を発見することはないと言いたいんだ。あなたがすることは特定の性質があることを発見して、その後私たちの存在の性質のような事実の基礎に権利を割り当てることだ。だから、私のターミノ

ロジーでは、私たちの権利は観察者相対的である — つまりある権利は、その権利の受け入れや割り当てに相対的にのみ存在するということだ。しかしそれは任意だとは意味しないよ。私たちはジョン・スチュワート・ミルがやったよりましてに自由な言論を正当化することができると私は思う。

ムーア:

あなたは哲学の楽しさについて語りました。一番楽しいのはあなたにとって何ですか？

サール:

私は哲学についてたくさん好きなことがあるよ。私はバークレーの学生、特にとても頭がよいが同時にすごく批判的な、そして熱心なある種のバークレーの学部生に教えるのがすごく好きだ。わたしは仕事が好きなんだ。私はあなたと今しているこの会話も好きだ。すごいと思うよ。あらゆる問題が出てきて、完全にオープンで、誰も一芝居打たないし、誰にも烙印を押そうとしないよ。私はたくさん文献を読むのが好きでなくてね。それが私の短所だ。私は読むべき哲学をあまり読まない。なぜかというとなんか身動きがとれないからだ。この本を読もうとする。そしてだいたい2ページめで身動きがとれなくなるんだよ。

ムーア:

どんな未来のプロジェクトを心にもっていますか？

サール:

オーマイガー！私が長生きするなら、100冊本を書きたいね。その一部は既に話した。本当に私はもっと本を書かなくちゃいけないと思っている。社会的存在論の理論とか合理性の理論とかあるなら、私が進むべきと思う方向の政治哲学を発展することがたぶんできるだろう。私が中庸の政治哲学と呼んでいるものだ。

ムーア:

中庸の政治哲学ですか？それをなんと呼べばいいでしょうか？右派保守主義でも完全な社会主義でもない第三の道と等価ですか？

サール:

いや違うよ。第三の道じゃないよ。それはこんなかんじだ。作るべき哲学的論点はあるが、私たちは、ポキャブラリーも、カテゴリーも、それを述べる知的資源さえないんだ。だからたとえば歩くにはただひどい。制度の集合としてメキシコはただ怖い。人々はいい。国は美しい。だがメキシコの制度構造はひどい。さて、ここに私たちの問題がある。政治家はそう言うことができない — さ

て、わかった、彼らは政治的理由のためそれを言うことはできない — だが、政治科学者はそれを言えない。なぜならそれは科学のように聞こえないからだ。そして哲学者も言うことができない。哲学者が言えるのはすべて抽象的なことだ。何について？それはロールズの無知のベールの条件を満たすのか？しかし政治的に分厚い用語で社会的、制度的現実について実際に語るためには、私たちはまだそれをすることができず、それをするボキャブラリーをもたなければならない。

ムーア：

ではどのように、私たちはそのボキャブラリーを通用させるのですか？

サール：

まあ、それについては心配はない。それは起こるか起こらないかだ。ただツールを作って、それが役に立つなら、みんなそれを使うよ。絶対。

ムーア：

その場合ポリティカル・コレクトネス運動が産んだ代わりのボキャブラリーの政治的社会的役割についてどう感じますか？

サール：

さて、彼らは、他の人間に多かれ少なかれ抑圧的なボキャブラリーを課そうとしたと思う。けどそれは働いていない。「政治的な正確さ」という言葉の使用自体は、この抑圧的な全体 — 全体主義は強すぎる — この権威主義的傾向の拒否だ。

ムーア：

オーウェルのニュースピークですか？

サール：

その通り — 私たちにこの種のオーウェルの「犯罪思考」の回避をさせようとするんだ。私が考えるニュースピークは恐ろしい。だけど私はそれは消え去ると思う。

ムーア：

サール教授、お話ができて光栄でした。大変ありがとうございます。素晴らしかったです。

[了]